

資料1 1996年8月23日のオサーマ・ビンラーディンによる対米ジハード宣言

(保坂修司「オサーマ・ビン・ラーデンの対米ジハード宣言」、『現代の中東』、35号、2003年7月、pp.83-105。)

邦訳：二聖モスクの地を占領するアメリカ人に対するジハード宣言

{アラビア半島から異教徒を追放せよ}

ウサーマ・ブン・ムハンマド・ブン・ラーディンから
世界中、とくにアラビア半島のムスリムの兄弟たちへのメッセージ

I

讃えあれアッラー^(註4)、われらその助けとお赦しを求めん。われら、過ちと悪行からの保護をアッラーに求めます。アッラーにより導かれたものは道を踏み誤ることなく、道を踏み誤ってきたものは導かれることなし。わたしは、アッラーのほかには神はおらず、アッラーに並ぶものなきことを証言する。わたしは、ムハンマドが神の僕にして、使徒であることを証言する。

「汝ら、信仰ある者どもよ、アッラーを、神にふさわしい畏敬の念をもって畏れ奉れ。どのようなことがあろうとも必ず、死ぬ時には立派な帰依者として死ねよ。」(コーラン 3:102)^(註5)

「人間どもよ、汝らの主を畏れまつれ。汝らをただひとりの者から創り出し、その一部から配偶者を創り出し、この兩人から無数の男と女とを(地上に)播き散らし給うたお方にましますぞ。アッラーを畏れまつれ。汝らお互い同士で頼みごとする時に、いつもその御名を引き合いに出し奉るお方ではないか。また母の胎をも。アッラーは汝らを絶えず厳重に監視し給う。」(コーラン 4:1)

「これ、信徒の者、お前たちアッラーを懼れ、常にまともなことばかり言うようにせよ。そうすればお前たちの行為の(曲がったところ)は直して下さるし、犯した罪も赦して下さろう。とにかくアッラーと使

徒の言いつけをよく守る人は、大成功に疑いない。」(コーラン 33:70-71)

讃えあれアッラー。預言者シュアイブ^(註6)のお言葉を伝え給うた。「わしは、ただ及ばずながら世の中を正しくしたいと願っておるだけのこと。が、このわしの願いがかなうもかなわぬもアッラーの御心次第。すべてをおまかせ申し、改悛の心をもってお縋り申しておる。」(コーラン 11:88)

讃えあれアッラー。次のように仰せになられた。「汝らは今まで人類のために生れ出た集団の中で最上のもの。汝らは義しいことを勧め、いけないことを止めさせようとし、アッラーを信仰する。」(コーラン 3:110)

アッラーの僕であり、アッラーの使徒である[ムハンマド]にアッラーの祝福と祈りがあらんことを。彼いわく。「違反を犯したのを見て、それをやめさせることができなければ、アッラーからの罰は免れぬ。」^(註7)

イスラームの民が、シオニスト・十字軍連合およびその共犯者たちによって彼らに加えられた侵略、不法、不正に苦しめられてきたことは隠されるべきではない。その侵略や不正の結果、ムスリムの血はもっとも安価になり、彼らの富は戦利品として敵の手中に入ってしまった。彼らの血はパレスチナやイラクで流された。レバノンのカーナー^(註8)での虐殺の恐ろしい映像は依然としてわれらの記

憶に新しい。タジキスタン、ビルマ、カシミール、アッサム、フィリピン、パッターニ、オガディン、ソマリア、エリトリア、チェチエン、ボスニア・ヘルツェゴビナでも虐殺は起きている^(註9)。これらの虐殺は身体を震えさえ、良心を苛むものである。世界はこれらをすべて見聞きしているにもかかわらず、この暴虐に反応しない。それどころか、米国とその同盟者のあいだの露骨な陰謀により、不正なる国連を隠れ蓑にして、土地を奪われた民は自衛のための武器を取ることも許されないのである。

イスラームの民は覚醒し、自分たちがシオニスト・十字軍連合の侵略の主たる標的であることに気づいた。人権に関するあらゆる虚偽の主張や宣伝は、世界のいたるところにいるムスリムに対する虐殺によって、叩き壊され、暴かれたのだ。

これらの侵略行為のうち、預言者——アッラーの祝福と祈りがあらんことを——の死以来、ムスリムに起きた最大最新のものはアメリカ十字軍とその同盟者による二聖モスクの地、イスラームの家の基礎、啓示の場、福音の源、聖なるカアバの場、全ムスリムの礼拝の方向の占領である。「われらこれを嘆き、ただ『アッラーを通じて以外、何の力もありません』というのみ。」

現在の状況において、そして世界を、とりわけイスラーム世界を席卷する祝福された覚醒の旗のもとで、わたしは今日、みなさんと出会う。アメリカ主導の不正なる十字軍運動によりイスラームの学者や宣教師たちは長いあいだ沈黙を余儀なくされた。アメリカは、彼らイスラームの学者や宣教師たちが、イブン・タイミーヤやイブズ・ブン・アブドゥッサラーム^(註10)のような先達の学者たち——アッラーが彼らを嘉し給わんことを——がしたように、イスラームの敵に対しイスラーム共同体を煽動することを恐れている。したが

って、シオニスト・十字軍連合は、誠実な学者たちや有能な宣教師たちを殺害したり、逮捕したりという手段に頼ってきた（われわれは彼らを賞讃したり、神聖化したりするつもりはない。アッラーのみがみずからお望みになるものを聖別され給う）。彼らは信仰戦士（ムジャーヒド）、シャイフ・アブドゥッラー・アッザーム^(註11)を殺害し、信仰戦士、シャイフ・アフマド・ヤーシーン^(註12)や（アメリカで）信仰戦士、シャイフ・ウマル・アブドゥッラフマーン^(註13)を逮捕した。

アメリカの命令により、彼らは二聖モスクの地でも多くの学者や宣教師たち、若者たちを逮捕した。そのなかには著名なシャイフ・サルマーン・アウダやシャイフ・サファル・ハワーリー^(註14)およびその兄弟たちが含まれている。「われらこれを嘆き、ただ『アッラーを通じて以外、何の力もありません』というのみ。」われわれ、わたし自身やわたしの組織自体も、この不正を蒙ってきた。われわれは、ムスリムたちに呼びかけることを禁じられ、パキスタン、スーダン、アフガニスタンで追われてきた。それゆえ、わたしは長いあいだ姿を見せられなかったのだ。しかし、アッラーのご加護により、今やホラーサーンのヒンドゥークシュの高い山やまで安全な基地を手に入れることができた。ここでは、アッラーのご加護により、世界最大の異教徒の軍が破壊された。そして、アッラーフ・アクバル（アッラーは至大なり）の信仰戦士たちの叫びのまえに超大国の神話は朽ち果てた。

今日、われわれはこの同じ山やまから、シオニスト・十字軍連合によりイスラーム共同体（ウンマ）に加えられてきた不正を除去するめに努力する。とりわけ、彼らが、エルサレムの祝福された土地、預言者——アッラーの祝福と祈りがあらんことを——の夜の旅の道程、二聖モスクの地を占領してきた後である。われらアッラーに勝利をお願い申す。ま

こと彼はわれらの主にして、全能なるもの。本日、ここよりわれわれは、イスラーム世界、とくに二聖モスクの地に起きてきたことを正す方法について話し、議論することで任務を開始する。とりわけ、人びとの生活、宗教に甚大な被害と大いなる侵略があったあとであり、われわれは、現状を正しい方向に戻し、人びとにみずからの権利を回復させるために、われわれが従うべき方途について検討することを望む。民間人、軍人、治安関係者、政府当局者、商人、若者、老人、さらには生徒、学生たちなど、あらゆる人びとに不正が影響を与えている。卒業しても就職先のない数十万のものたちが社会のなかでもっとも広範な場所を占めつつあるが、彼らにも影響がおよんでいる。

不正は工業や農業に携わる人たちをも、そして都市や農村の人びとをも蝕んでおり、ほとんどすべての人たちが何らかについて不平をいっている。二聖モスクの地の状況は噴火寸前の巨大な火山と同様であり、[いったん噴火すれば]異教(クフル)や腐敗そしてその根源を破壊することになろう。リヤードやフバルでの爆弾事件^(註15)は、過酷な抑圧、苦難、極端な不正、屈辱、貧困の結果として現れる、この火山の噴火への警告である。

人びとは自分たちの日常生活に十全に関心を払っている。誰でもが経済の悪化、インフレ、増大しつづける負債そして囚人でいっぱいになった刑務所について話している。収入のかぎられた公務員は数万や数十万サウジ・リヤールの債務について話す。彼らは、リヤールの価値が大半の主要通貨のなかで大幅に下落しつづけると不平をいう。大商人やゼネコンは、政府が彼らに対し数億、数十億リヤールの負債を抱えていることについて述べている。政府は国民に対し3400億リヤールの借金を背負っており、さらに毎日の利子の支払もあるし、対外債務もある。人びとは、自

分たちが最大の石油輸出国なのか疑問に思っている。人びとは、この状況が、現体制の抑圧的で非合法的な行為、方法に対し反対しなかったために、アッラーが人びとに与えた呪いであるとさえ、考えるようになっている。[現体制の抑圧的な行動には]聖なるイスラーム法(シャリーア)を無視し、人びとから合法的な権利を奪い、アメリカ人に二聖モスクの地の占拠を許し、誠実な学者たちを投獄すること[などが含まれている]。高潔なるウラマーや学者たち、そして商人やエコノミスト、この国の貴顕たちはみな、この破滅的な状況に注意を払ってきた。

状況を阻止し、正すためにすべての組織が迅速な努力を行ってきた。みな、この国が大きな惨劇に向かって突き進んでいるという点で合意している。その深淵はただアッラーのみが知り給う。ある大商人が注釈する。「国王は国家を66倍の惨劇に導いている。」「われらこれを嘆き、ただ『アッラーを通じて以外、何の力もありません』というのみ。」多くの王子たちは国民と感情を共有し、個人的には、この国で起きている腐敗や圧政、脅しへの懸念や反対を表明している。しかし、個人的な利益のための有力王族間の争いで国家は破壊されてしまった。現体制は、その行動の進路により、そのレジテマシーを篡奪したのである。

- (1) イスラームのシャリーア法を停止し、人定法と入れ替えた。現体制は誠実なウラマーたちや公正なる若者たちとの流血の対立に入っている。「われわれは彼らを賞讃したり、神聖化したりするつもりはない。アッラーのみがみずからお望みになるものを聖別され給う。」
- (2) 現体制は国家防衛において無能であり、ウンマの敵であるアメリカの十字軍がもっとも長い年月土地を支配することを許

した。十字軍部隊は、われわれの悲惨な状況——なかならずその経済的な側面において——の主たる原因となった。これは、これらの軍事力に対する正当化できない膨大な支出のためである。とくに石油産業分野でこの国に強制された政策の結果、アメリカ経済に適するように、[石油の]生産は増減され、価格も定められる。この国の経済は無視されているのだ。武器購入のためこの国には高額な契約が課される。人びとは、それなら現体制が存続するための正当性とは何かについて問いはじめた。

状況を阻止し、危険を回避するため、個人や社会の異なる集団によっても迅速な努力が行われている。彼らは私的、公的に政府に忠告を与えている。彼らは手紙や詩、報告、忠言を送り、町まちで調査を行い、彼らの改革や修正の運動にあらゆる有力者を徴募している。彼らは感情や儀礼、そして叡智を込めた方法で、大いなる過ちや腐敗を矯正する方法やそれらを悔悟することを求めている。[これらの過ちや腐敗は]宗教の基本的な原理や人びとの合法的な権利をも呑み込んできたのである。

しかし、残念ながら、現体制は人びとの話を聞くことを拒否し、彼らが馬鹿げていて、愚かであると非難した。従来の悪行にさらに大きな過ちが加えられ、事態はさらに悪化する。これらはすべて二聖モスクの地で起きているのである。これ以上黙っていることはできない。この問題を黙視することはもはや受け入れがたいのだ。

このような違反行為が最高レベルにまで到達し、イスラーム的原理の存在そのものを脅かす破壊力へとかわると、数百人の引退した官僚や商人、有名人、知識人によって支持された学者たちのグループが国王に対し改革の

実行を要請する書簡を書き送った。ヒジュラ暦1411年（1991年5月）、湾岸戦争のときの有名なシャウワール月書簡と呼ばれる書簡が400以上の署名をつけて王のもとに送られた。これは抑圧の中止と改革の実行を要求するものであった。国王はこれらの人びとに屈辱を与え、書簡の内容を無視することを決めた。国家の状態は非常に悪かったが、それがさらに悪化してしまった。しかし、人びとは何度も書簡や建白書を送ろうとした。とくに栄光ある『忠言覚書』はヒジュラ暦1413年（1992年7月）に国王に手交された。これは、病気を特定し、独自の正しい科学的なやりかたで治療法を記述したものであった。『忠言覚書』は現体制の哲学における陥穽や欠点を描写し、必要な行動や治療法を示唆していた。『覚書』には次のような描写がある。

- (1) 社会の指導層、学者たち、部族長、商人、教員、その他の貴顕たちが蒙っている脅しや嫌がらせ。
- (2) 国家内での法の状況とアッラーによって定められたシャリーアを無視した、許されるもの（ハラール）と禁じられるもの（ハラーム）の恣意的な宣言。
- (3) 事実を隠蔽し、情報を歪曲する道具となった報道およびメディアの状況。メディアは、人びとを宗教から乖離させるため、一部の人物を偶像化し、信徒のあいだに醜聞を撒き散らすという敵の計画を実行した。至高なるアッラーは仰っている。「醜聞が信徒の間に広まるのを見て喜んでいるような者どもは、苦しい罰を蒙ることになろう、現世でも来世でも。」（コーラン 24:19）
- (4) 虐待と人権の蹂躪。
- (5) 国家の財政的・経済的状況と政府のもつ債務と利子の巨額さから見た恐ろしい未来。これは、国民に対しより多くの関

税や税金が課せられながら、ウンマの富が一部の個人の私的な欲望を満足させるために消費されているということである。「預言者は姦通を犯した女性に関し次のように述べている。「彼女は、徴税人を赦すのに十分な方法で後悔した。」^(註16)

- (6) 社会サービスおよび社会基盤、とくに生活の基本である水の供給の悲惨な状況。
- (7) 軍に信じられないような金額が費やされているにもかかわらず、軍の訓練および準備状況は悪く、しかも総司令官が無能であること。
- (8) シャリーアが停止され、代わりに人定法が使用されている。
- (9) 外交に関して、『覚書』は、外交がイスラーム問題をいかに軽視しているか、ムスリムたちを無視しているかだけでなく、ムスリムの敵に対して支持と支援と支持が与えられているかを明らかにしている。ガザ・エリコや南イエメンの共産主義者のケースは依然として記憶に新しいし、それ以外のことをいうこともできる。

知識の民によって述べられているように、シャリーアの代わりに人定法を使用し、ムスリムに対して異教徒を支援することは、人からそのイスラーム的地位を奪う（ムスリムをムシュリク〈多神教徒〉にかえる）ことになる10の大罪に属している。全能のアッラーは仰っている。「せっかくこういうものを戴いておりながら、結局彼らは背いてしまう。すなわち彼らは本当の信者ではない。」（コーラン5:43）さらに「いや、いや、神かけて。彼らがお互い同士の揉め事にもお前の裁決を頼み来るようであれば、彼らはまだ本当の信者ではない。だがもしそうなったら、お前の下す判決に不満のあろう筈はなし、絶対服従あるのみじゃ。」（コーラン4:65）

『覚書』が柔らかい言葉、丁寧な書きかたで、アッラーを想起させ、実直で誠実な忠告を与えているにもかかわらず、またイスラームにおける忠言の重要性が国民に責任を有するものにとって絶対に本質的なものであるにもかかわらず、支持者はもちろんのことこの文書に多数の署名者がいたにもかかわらず、これらはみな『覚書』にとって取りなしにはならなかった。その内容は拒否され、署名したものと同調者たちは馬鹿にされ、旅行を禁じられたり、罰せられたり、また投獄されたものすらいた。

したがって、矯正と改革の唱道者たちが、国家の統合を守り、流血を避けるために、きわめて真摯に平和的手段を用いたことは明らかである。では、現体制はなぜすべての平和的な道を閉ざし、人びとを武力行使に向けたのであろうか。[武力行使は]正義と公正を履行するために彼らに残された唯一の選択であった。スルターン王子^(註17)とナーイフ王子^(註18)が、あらゆるものを破壊する内戦へと国家を追いやるのは誰のためであろうか。なぜ、改革運動を挫折させるため、国内の対立に火をつけ、人びとを対立させ、国家の息子である警察を煽動するものの意見を聞くのか。ウンマの財政的・人的資源を搾取するため、敵の政策を履行する、こうした裏切りものたちに平和と治安をゆだね、域内の主たる敵であるアメリカ・シオニスト連合に平和と治安を享受させていいのだろうか。

ナーイフ王子——内相——の顧問（ザキー・バドル元エジプト内相）は自分の祖国でも受け入れられなかった。彼は、エジプトで自国民に対する汚れた態度と攻撃のため、その職を解かれたにもかかわらず、ナーイフ王子には、罪と攻撃を支援するために温かく受け入れられたのである。彼は不正にも刑務所をこのウンマの最良の息子たちで満たし、彼らの母たちを嘆き悲しませた。現体制は、一部の

近隣諸国で起きたように、市民を軍人に対して、また軍人を市民に対し弄ぶことを望んでいるのだろうか。これがアメリカ・イスラエル連合の政策であることは疑いない。なぜなら彼らこそがこの状況で得をする第一のものだからである。

しかしながら、アッラーのご加護により、民間人であれ、軍人であれ、国民の大多数は、邪な策略に気づいている。彼らはたがいに弄ばれるのを拒否し、現体制によりアメリカ・イスラエル連合の政策をわが国におけるその代理人であるサウード家体制を通じて履行する道具となることを拒否した。

したがって、問題の根源に取り組まないかぎり、状況を矯正することはできないことでもみな合意している（棒の影は、棒を真っ直ぐにしないかぎり、真っ直ぐにはならない）。それゆえ、ウンマを小さな国家に分断し、過去数十年にわたり、混乱状態に押しやっていた主たる敵を打つことが肝要である。シオニスト・十字軍連合はイスラーム諸国に出てきた改革運動を封じ込め、挫折させるため迅速に動いた。その目的を達成するために、さまざまな方法が取られている。あるときは、「運動」はあらかじめ決められた、好ましからざる時と場所で武装闘争に引き摺りこまれ、またあるときは、シャリーア学部の卒業生でもある内務省の役人が駆り出される。彼らは、国民とウンマを（間違ったファトワーで）誤解、混乱させたり、運動に関して誤った情報を流したりするのだ。さらに別の場合には、一部の誠実な人たちが騙されて、ウラマーや運動の指導者たちに対する言葉の戦いに引き込まれ、些細な問題の議論で国民のエネルギーを浪費し、アッラーの聖法のもと人びとを統合するという大きな問題を見逃させるのである。

このような議論の影で、真実が虚偽によって覆い隠され、人びとのなかに生み出された個人的な対立や党派心がウンマをさらに分断

させ、より弱体化させてしまう。イスラームにおいてなすべきことの優先順位は失われ、冒瀆と多神教がウンマを掌握し、支配しつづける。われわれは内務省によって実行されている残虐な計画に注意を払わねばならない。正しい答えは、イブン・タイミーヤ^(注19)——アッラーが彼を嘉し給わんことを——が述べたように、知識の民によって決定されてきたことに従うことである。[イブン・タイミーヤいわく]「イスラームの民は、イスラーム世界の国々にを支配している主たる不信仰を除去するために力をあわせ、たがいに協力しなければならない。大いなる不信仰を除去するためであれば、[その不信仰からもたらされる被害よりも]小さな被害には耐えなければならない。」^(注20)

もし実行すべき義務が複数あるのであれば、まずもっとも重要なものを優先すべきである。信仰（イマーン）について重要な義務が、敵であるアメリカ人を聖地から駆逐すること以外にはありえないことは明らかだろう。信仰を除けば、それ以上に優先されるものは考えられない。知識の民、イブン・タイミーヤは述べる。「宗教と信仰を守るために戦うことは『集合的義務』であり、信仰につぐものとして、生活と宗教を腐敗させている敵と戦う以外の義務はない。この義務にはいかなる前提条件もない。敵とは最大限の能力を使って戦わねばならない。」（『ファトワー集補遺』参照）^(注21)もし、ムスリムの集合的な運動を除いて、敵を撃退することが不可能ならば、ムスリムにとって自分たちのなかでの小さな対立を見逃すことは義務である。一定期間これらの対立を見逃すことの悪影響は、主たる不信仰によるムスリムの土地の占領からもたらされる悪影響よりも小さいものである。イブン・タイミーヤはこの問題について解説し、小さな脅威を犠牲にして大きな脅威に立ち向かうことの重要性を強調した。彼はムス

リムと信仰戦士たちの状況を描写し、イスラームを実践していない軍人であっても敵に対する聖戦（ジハード）の義務を免れることはないと述べている。

イブン・タイミーヤはモンゴル人（タタル人）とアッラーの法を変える彼らの行動について言及したのち、次のように述べている。「アッラーを喜ばせ、そのお言葉を高め、その宗教を確立し、その使徒——神の祝福と祈りがあらんことを——に従うことの究極の目的はあらゆる側面で完璧な方法で敵と戦うことである。戦わないことからくる宗教への危険が戦うことのそれよりも大きいなら、たとえ一部の戦士たちの意図が、出世を求めるといふように、純粹でなくとも、また彼らがイスラームの一部の規則や戒律を守らなくとも、戦うことは義務である。二つの危険のうち、小さなほうを犠牲にして大きなほうを駆逐することはイスラームの原理であり、守られねばならない。正しいものと正しくないものとともに戦うのはスンナの民の伝統である。預言者——神の祝福と祈りがあらんことを——が述べているように、アッラーは正しいものと正しくないものによってこの宗教をお支えになる。正しくない兵士や司令官の支援なしに戦うことができないのなら、二つの可能性がある。戦いを無視して、現世と宗教にとって大いなる危険である相手が支配するか、正しくない支配者の支援を得て戦い、二つの危険のうち大きなほうを駆逐して、イスラームの法——すべてではないにしろ——大部分を履行するか二つの可能性である。後者の選択肢はこうした条件、そして他の同様な状況のもとでは、正しい義務となる。実際、正統カリフ時代以降に起きた戦闘および征服の多くはこの型であった。」（『ファトワー集』26/506）^{（注22）}

目が見えずとも、耳が聞こえずとも、被害が幅広く拡大し、大罪が広くいきわたってい

ることは誰にも否定できない。その結果、すでに多神教の深刻な不正に到達し、主権と立法というアッラーのみが有する権利をアッラーとわかちあうまでになっている。全能者いわく。「さてそのルクマーン^{（注23）}がまた自分の息子を誡めてこう言ったことがある、『これ、わが子よ、お前、アッラーと一緒にほかの（邪神）を拝むようなことをしてはなりませんぞ。多神に仕えるということほど世にけしからんことはない』と。」（コーラン31:13）人間がでっちあげた法律が持ち出され、高利（リバー）のようにアッラーによって禁じられたことが赦されるようになっている。高利をあつかう銀行が、二聖モスクの地で競いあい、アッラーの命令に従わず、アッラーに宣戦を布告している。「アッラーは商売はお許しになった、だが利息取りは禁じ給うた。」（コーラン2:275）これはみな聖地の聖モスクの周辺で起きていることである。アッラーはコーランのなかで高利で商うムスリムに対する比類なきお約束（他のいかなる罪びともも約束されたことはない）について仰せられた。「これ、信徒の者、アッラーを畏れかしこめよ。またとどこおっている利息は帳消しにせよ、汝らが本当の信者であるならば。だがもし汝らそれがいやだと言うのなら、よいか、アッラーとその使徒から宣戦を受けるものと心得よ。」（コーラン2:278-279）これぞ、（罪であると信じながら）高利で商う「ムスリム」のためのもの、では、アッラーによって禁じられたもの（高利などの罪）を合法化し、みずからアッラーと並べるものはどうなるのか。上述のすべてのことにもかかわらず、われわれは、政府が一部の正しいウラマーや宣教師たちに道を過たせ、罪や不信仰を拒絶することから引き離そうとしているのを見出す。「われらこれを嘆き、ただ『アッラーを通じて以外、何の力もありませぬ』というのみ。」

II

このような状況下においては、大いなる不信仰である敵を国から排除することは主要な義務となる。信仰以外で、これ以上に重要な義務はほかにない。二聖モスクの地および預言者の最遠のモスク（アクサー・モスク）への道程を占領しているアメリカ・イスラエル連合という敵に対しウンマを準備させ、唱導するために最大限の努力が行われなければならない。またムスリムたちに、自分たちの内輪の戦いにかかずらっている場合ではないことを想起させねばならない。このようなことは次のような深刻な事態を招くことになる。

- (1) ムスリムの人的資源の消耗。大半の死傷者、犠牲者はムスリムから出る。
- (2) 経済的・財政的資源の浪費。
- (3) 国家の社会基盤の破壊。
- (4) 社会の分裂。
- (5) 石油産業の破壊。アメリカの十字軍部隊がイスラームの湾岸諸国の陸海空に駐留していることは世界最大の石油埋蔵を危機にさらす最大の危険である。域内にこれらの軍が駐留するのは国民を怒らせ、彼らの宗教、感情、誇りへの攻撃を誘発させ、領土を占領した侵略者に対する武装蜂起へと彼らを追い込むことになる。したがって、域内での戦闘の拡大が石油の富を燃やしてしまう危険がある。湾岸諸国および二聖モスクの地の経済権益は被害を受けるが、世界経済にはより大きな被害が出るだろう。わたしはここで、わが兄弟たる信仰戦士（ムジャーヒド）たち、国家の息子たちに、この「石油の」富を守り、戦闘に巻き込まないように警告したい。それは偉大なるイスラームの富であり、アッラーのお赦しと恩寵により近い将来建設されるであろうイスラーム

国家にとって欠くことのできない経済力となるからである。われわれはまた侵略者であるアメリカにもこのイスラームの富を焼失したりしないよう警告する。（これは、彼らが、終戦時に犯しかねない犯罪である。なぜなら彼らは「石油が」その合法的な所有者の手に落ちないように、また、域内の石油の主要な消費者であるヨーロッパや極東とくに日本におけるアメリカの競争相手に経済的な打撃を与えるため「石油に火を放ちかねない」からである。）

- (6) 二聖モスクの地の分断とイスラエルによるその北部の併合。二聖モスクの地の分断はシオニスト・十字軍連合の本質的な要求である。アッラーの恩寵により、将来のイスラーム国家の指導のもと、このような巨大な資源をもった大国が存在するようなことになれば、パレスチナにおけるシオニスト国家の存在そのものに対し深刻な脅威となる。高貴なるカアバ、全ムスリムのキブラは二聖モスクの地をイスラーム世界の統一の象徴にしている。さらに世界最大の石油埋蔵量があることは、二聖モスクの地をイスラーム世界における重要な経済大国にする。二聖モスクの地の息子たちは彼らの先祖である教友たち——アッラーが彼らを嘉し給わんことを——の生きざま（シーラ）と直接に結びついている。彼らは先祖たちのシーラをウンマの栄光を再建し、ふたたびアッラーのみ言葉を高くかかげるための源泉であり、実例であると考え。さらに南イエメンにアッラーの大義のために戦う戦士たちが多数存在することも域内におけるシオニスト・十字軍連合にとって戦略的な脅威である。預言者——アッラーの祝福と祈りがあらんことを——いわく。「約12000人がアデン・アブヤンから現れ、アッラーとその使徒の大義を支

行った演説である。彼は、フバルにおけるアメリカ軍兵士の駐留がアメリカの権益を守るためであると述べている。投獄されているシャイフ・サファル・ハワーリー——アッラーがその釈放を早めんことを——は70ページの本を執筆し、そのなかで、アメリカ人のアラビア半島駐留があらかじめ計画された軍事的占領であることの証拠を提示している^(註30)。パレスチナの兵士たち、信仰戦士(ムジャーヒド)たちが欺かれ、アクサー・モスクを失ったときと同じように、現体制はムスリムたちを欺こうとしている。ヒジュラ暦1304年(西暦1936年)、パレスチナの覚醒したムスリム国民はイギリスの占領軍に対する偉大なる闘争、ジハードを開始した^(註31)。イギリスは、ムジャーヒドたちや彼らのジハードをとめることはできなかった。しかし、彼らの悪魔は、パレスチナにおける武装闘争をとめるには、彼らの代理人である[サウジアラビア初代国王]アブドゥルアジーズ国王が何とかムジャーヒドたちを欺くことを通じて以外にはできないと吹き込まれた。アブドゥルアジーズ国王はイギリスの主人に対する義務を果たした。彼は自分の2人の息子を派遣してムジャーヒドの指導者たちと会見させ、彼らにアブドゥルアジーズがイギリス政府の約束を保証すると知らせたのである。[イギリスの約束とは]もし彼らがジハードを中止すれば、その地域を離れ、ムジャーヒドたちの要求にも積極的に応えるというものであった。そして、アブドゥルアジーズ国王はムスリムたちの最初のキブラを失う原因となったのである。国王はムスリムに対する十字軍に加わった。アッラーのためのムジャーヒドたちを支援し、アクサー・モスクを解放するかわりに、ムスリムたちを失望させ、侮辱したのだ。

今日、彼の息子であるファハド国王は、聖域に残されたものを失わせるため、ふたたびムスリムたちを欺こうとしている。イスラ

ム世界が二聖モスクの地に十字軍の軍隊が到着したことを後悔しているとき、国王は(アメリカ人の到来に関するファトワーを發布した)ウラマーたち^(註32)やマッカで開催された世界イスラーム連合の会議に集まったイスラームの指導者たちに対し嘘をついた^(註33)。国王は「問題は単純だ。アメリカおよび同盟国の軍隊は数カ月で域内から去るだろう」と述べた。現在、彼らの到着からすでに7年が経過している。現体制は彼らを国土から追い出すことはできないのだ。現体制は、その無能ぶりについて弁明をしていないし、アメリカ人は去ると述べ、人びとを騙しつづけている。しかし、けっして、信仰者は同じ穴に落ちたり、同じ蛇に咬まれるようなことはない。まこと他者の悲しい経験に注意を払うものは幸いである。

占領者に反対するよう軍隊、防衛隊、治安当局者に動機づけを与えるかわりに、現体制は彼らを侵略者防衛のために利用し、侮辱と裏切りを強めてきた。「われらこれを嘆き、ただ『アッラーを通じて以外、何の力もありません』というのみ。」軍や警察、治安部隊のなかの小さなグループが現体制に騙され、その圧力を受けてムスリムを攻撃し、彼らの血を流してきた。われわれは彼らに次のような話を想起させよう。「わたし[預言者ムハンマド]は、わたしの友人たちを敵とするものと戦うことを約束する」はブハーリーによって伝えられている^(註34)。また[預言者]——アッラーの祝福と祈りがあらんことを——いわく。「最後の審判の日、ある男が他のものを引き連れてやってきて、その男に殺されたと文句をいった。アッラー——その名前が高められんことを——はお尋ねになった。『なぜお前は彼を殺したのだ。』すると、告発されたものは答えた。『わたしは、すべての賞讃があなたさまにあれかしとそういたしました。』アッラー——その名前が高められんこ

行った演説である。彼は、フバルにおけるアメリカ軍兵士の駐留がアメリカの権益を守るためであると述べている。投獄されているシャイフ・サファル・ハワーリー——アッラーがその釈放を早めんことを——は70ページの本を執筆し、そのなかで、アメリカ人のアラビア半島駐留があらかじめ計画された軍事的占領であることの証拠を提示している^(注30)。パレスチナの兵士たち、信仰戦士(ムジャーヒド)たちが欺かれ、アクサー・モスクを失ったときと同じように、現体制はムスリムたちを欺こうとしている。ヒジュラ暦1304年(西暦1936年)、パレスチナの覚醒したムスリム国民はイギリスの占領軍に対する偉大なる闘争、ジハードを開始した^(注31)。イギリスは、ムジャーヒドたちや彼らのジハードをとめることはできなかった。しかし、彼らの悪魔は、パレスチナにおける武装闘争をとめるには、彼らの代理人である[サウジアラビア初代国王]アブドゥルアジーズ国王が何とかムジャーヒドたちを欺くことを通じて以外にはできないと吹き込まれた。アブドゥルアジーズ国王はイギリスの主人に対する義務を果たした。彼は自分の2人の息子を派遣してムジャーヒドの指導者たちと会見させ、彼らにアブドゥルアジーズがイギリス政府の約束を保証すると知らせたのである。[イギリスの約束とは]もし彼らがジハードを中止すれば、その地域を離れ、ムジャーヒドたちの要求にも積極的に応えるというものであった。そして、アブドゥルアジーズ国王はムスリムたちの最初のキブラを失う原因となったのである。国王はムスリムに対する十字軍に加わった。アッラーのためのムジャーヒドたちを支援し、アクサー・モスクを解放するかわりに、ムスリムたちを失望させ、侮辱したのだ。

今日、彼の息子であるファハド国王は、聖域に残されたものを失わせるため、ふたたびムスリムたちを欺こうとしている。イスラ

ム世界が二聖モスクの地に十字軍の軍隊が到着したことを後悔しているとき、国王は(アメリカ人の到来に関するファトワーを發布した)ウラマーたち^(注32)やマッカで開催された世界イスラーム連合の会議に集まったイスラームの指導者たちに対し嘘をついた^(注33)。国王は「問題は単純だ。アメリカおよび同盟国の軍隊は数カ月で域内から去るだろう」と述べた。現在、彼らの到着からすでに7年が経過している。現体制は彼らを国土から追い出すことはできないのだ。現体制は、その無能ぶりについて弁明をしていないし、アメリカ人は去ると述べ、人びとを騙しつづけている。しかし、けっして、信仰者は同じ穴に落ちたり、同じ蛇に咬まれるようなことはない。まこと他者の悲しい経験に注意を払うものは幸いである。

占領者に反対するよう軍隊、防衛隊、治安当局者に動機づけを与えるかわりに、現体制は彼らを侵略者防衛のために利用し、侮辱と裏切りを強めてきた。「われらこれを嘆き、ただ『アッラーを通じて以外、何の力もありません』というのみ。」軍や警察、治安部隊のなかの小さなグループが現体制に騙され、その圧力を受けてムスリムを攻撃し、彼らの血を流してきた。われわれは彼らに次のような話を想起させよう。「わたし[預言者ムハンマド]は、わたしの友人たちを敵とするものと戦うことを約束する」はブハーリーによって伝えられている^(注34)。また[預言者]——アッラーの祝福と祈りがあらんことを——いわく。「最後の審判の日、ある男が他のものを引き連れてやってきて、その男に殺されたと文句をいった。アッラー——その名前が高められんことを——はお尋ねになった。『なぜお前は彼を殺したのだ。』すると、告発されたものは答えた。『わたしは、すべての賞讃があなたさまにあれかしとそういたしました。』アッラー——その名前が高められんこ

とを——は仰せになられた。『まことあらゆる賞讃はわしのものだ。』今度は別の男が4番目の男を連れてやってきて、似たような文句をいった。アッラー——その名前が高められんことを——はお尋ねになった。『お前はなぜその男を殺したのだ。』告発された男は答えた。『賞讃が何某のためにあれと思ってそうしました。』アッラー——その名前が高められんことを——は仰せになられた。『賞讃はわしのものであり、何某のものではない。殺された男の罪も背負い（地獄の業火に落ちるがよい）。』^(注35) ナサーイーの伝える別の言葉では「告発されたものは『何某の支配あるいは王国を強めるために』と述べた」となっている^(注36)。

今日、あなたがたの兄弟たちと息子たち、二聖モスクの地の息子たちはアッラーの大義のためのジハードを開始している。このウンマの栄光を再建し、占領された聖域を解放するため、あなたがたがこの使命を実行したがつていることにも疑いはない。しかしながら、われらの軍事力と敵の軍事力のあいだの非対称のため、適切な戦闘方法を取らねばならないことは明らかであろう。すなわち、極秘で動くことのできる迅速な軽装備の軍である。いいかえれば、ゲリラ戦を開始せよということだ。国家の息子たちよ、軍隊ではない。ゲリラ戦に参加せよ。ご存じのとおり、現状では軍隊は十字軍の敵軍隊と通常の戦争に従事しないほうが賢明である。（例外は軍メンバー個人による勇敢で強力な作戦である。これは通常の形式による公式の軍の動きがなく、強烈な反撃が軍に向けられることはないからだ）。だが、大きな利点が達成できる見込みがあり、敵側に大損害を与えられるなら（これはその基礎や社会基盤を揺るがし、破壊することになる）、[正規軍が通常の戦闘を行い] 敵を敗走させ、国から駆逐する支援になるだろう。

あなたがたの兄弟であり、息子であるムジ

ヤーヒドたちは、あなたがたが、必要な情報や物資、武器を提供することなど、あらゆる可能な手段をもって彼らを支援することを求めている。治安当局者はとりわけ、ムジャーヒドたちを匿い、敵軍に対しできるかぎり彼らを助け、敵軍のなかに噂や恐怖、落胆を振りまくよう求められている。

われわれは、現体制が、ムジャーヒドたちとあなたがたのあいだに対立や紛争を惹起しようとして、治安当局者、防衛隊、軍隊の兵士たちに対し計画的な行動をとり、それをムジャーヒドたちのせいにする可能性について、あなたがたに注意を喚起する。現体制がそのような機会を利用できるようにしてはならない。

現体制は、国家あるいは国民によって引き起こされてきたことに完全なる責任を負う。しかし、アメリカ占領軍こそが現状の原理であり、主たる原因なのだ。したがって、アッラーのご加護により、敵が完全に打ち破られるまで、彼らを破壊し、彼らと戦い、彼らを殺害することに努力を傾注すべきである。アッラーのお許しにより、あなたがたが決定的な役割を果たすことができる 때가やってくる。そのとき、アッラーのみ言葉は至高のものとなり、異教徒たち（カーフィルーン）のそれは低劣のものとなる。あなたがたは侵略者に鉄拳を見舞うことになる。あなたがたは正しい道を再建し、人びとにその権利を賦与し、真にイスラーム的な義務を履行することになる。アッラーがお望みになれば、これらの問題について別の話をしよう。

わがムスリムの兄弟たちよ（とくにアラビア半島の兄弟たちよ）、

あなたがたがアメリカ製品を買うために支払う金は銃弾へと変えられ、パレスチナにおけるわが兄弟たちに対して、そして明日（未

来)には二聖モスクの地のわが息子たちに対して使用される。これらの製品を買うことでわれわれは彼らの経済を強化し、逆にわれわれの搾取や貧困を増加させているのだ。

二聖モスクの地のムスリムの兄弟たちよ、

信じがたいことに、わが国はアメリカからの武器購入で世界最大であり、アメリカの通商上のパートナーとしても域内最大である。アメリカ人はパレスチナの占領やパレスチナでのムスリムの追いたてや殺害で、武器や人材や財政支援を与え、シオニストの兄弟たちを助けているのだ。

わが国との貿易からあがる巨額の収入を占領者たちに与えないようにすることは、彼らに対するわれわれのジハードにとって非常に重要な支援となる。われわれの彼らに対する怒り、嫌悪を示すことは非常に重要な道徳的行為である。そうすることによって、われわれは、われわれの聖域から十字軍やシオニストを除去し、アッラーのお許しにより、彼らを失望させ、敗北させながら強制退去させる(過程)に参加することができる。

われわれは、二聖モスクの地や他国の女性たちがアメリカ製品をボイコットすることで自分たちの役割を果たすことを期待する。

もし、経済的なボイコットにムジャーヒドたちの軍事作戦が合わされば、敵を敗北させることは、アッラーのお許しにより、近くなるであろう。しかし、ムスリムたちが彼らのムジャーヒドの兄弟たちと協力せず、支援も行わないならば、実際のところ彼らは敵軍に財政支援を与え、戦争を拡大し、ムスリムの苦難を増加させていることになるのだ。

世界中のどんな治安・諜報機関であっても、市民に敵の製品を無理やり購入させることはできない。アメリカ製品の経済的ボイコットは、敵に打撃を加え、弱体化させる非常に有

効な武器であり、これは現体制の治安部隊の監督下にはないことである。

わたしの話を終えるまえに、イスラームの若者たち、ムハンマド——神の祝福と祈りがあらんことを——のウンマの輝かしい未来の人びとに対する重要なメッセージがある。われわれは、若者たちとウンマの歴史上のこの困難な時期における彼らの義務について話した。この時代においては、若者だけが変化するさまざまな義務を履行するために前進することができる。一部の著名人たちがイスラームを防衛し、政府による不正、攻撃、テロから自分自身やその富を救うという彼らの義務に躊躇してきたが、若者たち——神が彼らを守らんことを——は前進し、イスラームの聖域を占領するアメリカ・シオニスト連合に対するジハードの旗をかかげてきた。この物質主義的な世界を愛するよう騙されてきたものたち、また政府によって嚇されてきたものたちは最悪の裏切り、二聖モスクの地の占領を合法化することを選んだのだ。「われらこれを嘆き、ただ『アッラーを通じて以外、何の力もありませぬ』というのみ。」われわれはあなたがた若者たちの行動で驚くことはない。若者たちはムハンマド——神の祝福と祈りがあらんことを——の教友である。このウンマのファラオであったアブージャフル^(注37)を殺したのも若者ではなかったか。われらの若者たちは最良の祖先たちの最良の子孫なのである。

アブドゥッラフマーン・ブン・アウフ^(注38)——アッラーが彼を嘉し給わんことを——いわく。「わたしがバドルにいたとき、2人の若者が、1人はわたしの右に、もう1人はわたしの左にいたことに気づいた。彼らの1人が(他人に聞かれないよう)わたしに静かに尋ねてきた。『おじきよ、アブージャフルがどれかおれに教えてくれ。』アブドゥッラフマーンは『彼をどうしたいんだ』という、

少年は答えた。『アブージャフルが神の使徒を虐待したと教えられた。おれの命をその手にもつアッラーに誓って、もしアブージャフルを見かけたら、おれたちのどちらかが死ぬまで、おれの影をあいつの影から離させない。』アブドゥッラフマーンいわく、『わたしは驚いた。それからもう1人の若者が最初の若者と同じことを尋ねてきたのだ。その後、わたしは人びとのなかにアブージャフルがいたのを見つけたので、少年たちに『見えるか。これが、おまえたちがわしに尋ねた男だ』といった。2人の若者は剣でアブージャフルを切り、彼を殺した』と。』アッラーは偉大なり。讚えあれアッラー。年若い2人の若者であったが、忍耐強く、熱意と勇氣、そしてアッラーの宗教に対する誇りがあった。2人とも敵に対して誘発されるべき殺人というもっとも重要な行為について尋ねている。これがこのウンマのファラオであり、バドルの戦いで多神教徒(ムシュリク)側の指導者であったアブージャフル殺害である。アブドゥッラフマーン・ブン・アウフ——アッラーが彼を嘉し給わんことを——の役割は2人の若者をアブージャフルの方向に向けたことである。これが当時の若者の忍耐であり熱意であり、彼らの父たちの忍耐であり、熱意であった。今、敵と戦う技術や知識をもった人びとに求められているのはこの役割である。彼らは彼らの兄弟や息子たちをこのように導いていかなければならない。いったんこれがなされれば、われわれの若者たちは、かつて彼らの祖先たちが述べた「アッラーに誓って、もしアブージャフルを見かけたら、おれたちのどちらかが死ぬまで、おれの影をあいつの影から離させない」という言葉を繰り返すだろう。

またアブドゥッラフマーン・ブン・アウフのウマイヤ・ブン・ハラフに関する話は、不信仰の頭を殺害するビラール^(注39)——神が彼を嘉し給わんことを——の粘り強さを示して

いる。「不信仰の頭はウマイヤ・ブン・ハラフだ。もしやつが生き残っているなら、おれは生きていられない」とビラールは述べた。

数日前、十字軍のアメリカの国防長官が「リヤードとフバルの爆弾事件からひとつの教訓を得た。卑怯なテロリストに攻撃されても退かないということだ」と述べたと通信社が伝えていた。

国防長官にいおう。この話は、嘆き悲しむ母親を笑わせるものであり、おまえたち全員を蔽っている恐怖を示している。おまえたちのこの偽りの勇氣は、1983年(ヒジュラ暦1403年)にベイルートで爆弾が爆発したとき、どこにあったのだ。おまえたちは穴だらけでこなごなにされ、241人の海兵隊を中心とする兵士たちが死亡した。そして、二つの爆弾が爆発し、24時間以内におまえたちがアデンを去っていったとき、この勇氣はどこにあったのだ。

しかし、おまえたちのもっとも屈辱的な事件はソマリアにおいてであった。アメリカの力と新世界秩序におけるアメリカの冷戦後のリーダーシップに関して活発な宣伝があったのち、おまえたちは2万8000人のアメリカ兵を含む数万人の多国籍軍兵士をソマリアに進攻させた。しかし、小さな戦闘で数十人の兵士が殺され、1人のアメリカ人パイロットがモガディシオの街頭に引きずり出されると、おまえたちは失望、屈辱、敗北そしておまえたちの死者を連れてその地を去っていったのである。クリントンは全世界のまえに現れ、威嚇し、報復を約束した。しかし、これらの威嚇は単なる撤退の準備にすぎなかった。おまえたちはアッラーによって屈辱を与えられ、撤退したのだ。おまえたちの無能さ、弱さは非常に明白になった。ベイルート、アデン、モガディシオという三つのイスラームの都市でおまえたちが敗北したのを見ることは、すべてのムスリムの「心」にとって喜びであり、

信じる民族の「胸」にとっては治療でもあった。

わたしは国防長官にいう。二聖モスクの地の息子たちはアフガニスタンでロシア人と、ボスニア・ヘルツェゴビナでセルビア人と戦うために出ていった。そして今日、彼らはチェチェンで戦い、神のお許しにより、おまえの仲間であるロシア人に対し勝利を収めている。アッラーの命令により、彼らはタジキスタンでも戦っている。

わたしはいう。二聖モスクの地の息子たちは、全世界での不信仰者たち（クッファール）との戦い（ジハード）が絶対に必要であると感じ、強く信じている。彼ら自身の土地、彼らの誕生の地で戦い、彼らの聖域である高貴なるカアバ（全ムスリムのキブラ）を守ることに關しては彼らはより熱狂的で、より強力で、数もより多い。彼らは、世界のムスリムたちが勝利まで彼らを助け、支えてくれることを知っている。彼らの聖域を解放することはすべてのムスリムにかかわる最大の問題であり、現世におけるすべてのムスリムの義務なのである。

わたしはおまえにいおう、ウィリアム（国防長官）よ。これらの若者は、おまえが生を愛するのと同じように、死を求めている。彼らは、尊厳、誇り、勇気、寛大さ、誠実さ、犠牲的精神を先祖代々受け継いでいる。彼らは戦争においてはもっとも強力であり、堅固なものである。彼らはこれらの価値観を彼らの先祖たちから（イスラーム以前のジャーヒリーヤ時代からも）受け継いでいる。これらの価値観はイスラーム到来によって認められ、完成させられた。アッラーの使徒——神の祝福と祈りがあらんことを——いわく。「わたしはよき価値観を完成させるために遣わされた」と（『小真正集成』）^(註40)。

異教の王、アムル・ブン・ヒンドが同じ異教のアムル・ブン・クルスームを侮辱しよう

としたとき、後者は王の首を剣で切断し、攻撃や侮辱、憤怒を拒絶したのである^(註41)。

王の抑圧が度を越せば、

われら屈辱に甘んじるのを拒否する。

いかなる命により、アムル・ブン・ヒンドよ、

われらを貶めようとするのか。

いかなる命により、アムル・ブン・ヒンドよ、

われらの敵に耳を貸し、われらに無礼を働くのか。

われらの不屈さは、アムルよ、

おまえのまえで敵を疲弊させ、屈服することなし。

III

われらの若者たちは死後の樂園を信じている。彼らは、戦闘への参加がその日を近くしないことも、とどまっていたからといってその日が遠くならないことも信じている。アッラー——いと高くあれ——は述べ給うた。「誰ひとり、定めの時が来て、アッラーのお許しを戴いてでなければ死ぬわけには行かぬ。」（コーラン 3:145）われらが若者たちはアッラーの使徒——神が祝福と祈りを与えんことを——の次のような言葉を信じる。「少年よ。いくつかの言葉を教えよう。アッラー（の大義、命令）を守るのだ。さすれば、アッラーはおまえを守ってくださろう。アッラー（の大義）を守れ、さすれば、アッラーはおまえとともにあるだろう。もし願いごとがあれば、アッラーにお願いもうせ。助けが必要なら、アッラーにお頼みもうせ。そして知るがよい。世界中が集まっておまえに利益を与えようとも、アッラーがお定めになったもの以上のものはもらえぬことを。また、もし世界中が集まっておまえを傷つけようとしても、アッラ

一があらかじめお定めになったこと以上には傷つけられぬことを。筆を取り上げられ、紙がなくなろうと、これはもう決められたこと。これら真実のなかのことをけっして変えることはできぬ。」(『小真正集成』)^(註42)

わらわが若者たちは、次の詩歌の意味を知っている。

「死が必定ならば、臆病に死ぬのは恥。」

また別の詩人は次のように詠っている。

「剣で死なずとも、死ぬものは死ぬ。多くの理由があろうとも、ただひとつ死あるのみ。」

これらの若者たちは、ムジャーヒドたちと殉教者たちへの報酬の大きさに関してアッラーとその使徒——神の祝福と祈りがあらんことを——によって伝えられたことを信じている。アッラー——いと高くあれ——は仰せになられた。「アッラーの道に斃れた者の働きは決して無になさりはせぬ。きっと御自ら手をとって、その心を正し、前々から知らせておいて下さった樂園にはいらせて下さろう。」(コーラン 47:4-6) アッラー——いと高くあれ——は仰せになられた。「アッラーの路に斃れた人々のことを死人などと言ってはならぬ。否、彼らは生きている。ただ汝らにはそれがわからないだけのこと。」(コーラン 2:154) 神の使徒——神の祝福と祈りがあらんことを——いわく、「アッラーの大義のために戦うものには、アッラーは樂園で百倍ものご用意をされ給う。倍のあいだですら、天と地ほどの開きがあるというのに」と(『小真正集成』)^(註43)。また彼いわく、「最良の殉教者とは、死ぬまで戦闘から顔を背けないものである。そのようなものが最高のジャンナ(天国)におる。その主は彼らに笑いかける。主がそ

の僕に笑いかけるとき、そのものに責任を負わせることはない」^(註44)と。これは真正で信頼できる経路でアフマドにより伝えられた。またいわく、「殉教者は死の苦痛を感じることはない。ただ、ちょっとつままれたように感じるのみ」と(『小真正集成』)^(註45)。またいわく、「アッラーにかけて殉教者の特権は保証されている。血の最初のほとぼしりとともにお赦しが与えられ、樂園に自分の席が示される。また信仰(イーマーン)の宝玉で飾り立てられ、美しきものを娶り、墓の試練からも守られ、審判の日にも安全を保証される。尊厳の冠をかぶられるが、そのルビーは現世(ドゥンヤ)全体とそのなかにあるものすべてに勝る。72人の純粋なる樂園の処女たち^(註46)と結婚し、みずからの取りなしで自分の親戚70人もが[樂園に]受け入れられる」と。これは(真正にして信頼できる経路により)アフマドとティルミジー^(註47)により伝えられた。

これらの若者たちは、おまえたちアメリカと戦うことが、啓典の民ではない他の誰かと戦うよりも2倍の報酬が得られることを知っており、おまえたちを殺して樂園に入ることのほか何の望みももっていない。異教徒やおまえたちのような神の敵は誠実なる処刑人と同じ地獄に入れない。われらの若者たちはアッラー——いと高くあれ——のみ言葉を詠い、朗誦する。「さ、彼らと戦うがよい。きっとアッラーは汝らの手で彼らを罰し、彼らを辱しめ、汝らを助けて彼らを撃ち、そして信者たちの胸を癒して下さろう。」(コーラン 9:14) また預言者——神の祝福と祈りがあらんことを——の言葉にいわく、「わが魂をその手に抱く神かけて、わたしは誓う。今日彼らと戦い辛抱強く攻撃し、引き下がらぬものたちは死ぬことはない。まことアッラーはそのものを樂園へと連れていき給う」と。預言者——神の祝福と祈りがあらんことを——はさらに彼らにいう。「樂園へと進んでいこう。そ

こは天と地ほどに広いぞ。」^(注48)

また若者たちは次のような全能者のみ言葉を朗誦する。「さて、お前たち、信仰なき者どもといざ合戦という時は、彼らの首を切り落とせ。」(コーラン47:4)^(注49) これらの若者たちはおまえ(ウィリアム・ペリー)に説明を求めようとはしない。

彼らは歌いながら、おまえにいうだろう。われらのあいだに説明を要することなどない。ただ殺害と斬首あるのみ。

さらに彼らはおまえにいう。おまえの先祖であるビザンツ皇帝、ナグフルがムスリムを嚇したとき、彼らの先祖である信徒の統率者、ハールーン・ラシードは彼に「信徒の統率者、ハールーン・ラシードよりローマ人の犬、ナグフルへ。返答はおまえが聞くことはない。おまえが見るものこそ返答である」と応えた。ハールーン・ラシードはイスラームの軍を戦場に差し向け、ナグフルに徹底的な敗北を与えたのである^(注50)。

おまえが卑怯者と呼んだ若者たちは、おまえと戦い、おまえを殺すために仲間と競い合っている。そのうちの1人は次のように詠っている。

われらがフバルを爆破したとき、十字軍は灰となった。

危険を厭わぬイスラームの勇敢なる若者とともに。

暴君がおまえを殺すと嚇されたら、応えるがよい。わが死こそ勝利なりと。

わたしがその王を裏切ったのではない、彼がわれらのキブラを裏切ったのだ。

彼は、聖なる国に人類でもっとも不潔なものを許した。

わたしは偉大なるアッラーに誓った。信仰を拒否したもの誰とでも戦うと。

10年以上のあいだ、彼らはアフガニスタン

で肩に武器をかついできた。彼らはアッラーに誓う、アッラーがお望みになられば、おまえたちが駆逐され、打ち負かされ、屈辱にまみれるまで、生きているかぎりおまえたちに対し武器をかつぎつづけるだろうと。彼らは生きているかぎり、詠いつづける。

ウィリアム[・ペリー]よ、明日、おまえは、どの若者が誤って導かれた同胞たちと戦っているかを知るだろう。

若者は笑いながら、戦い、穂先を深紅に染めて戻ってくる。

アッラーよ、平時には人間、戦時には悪魔となる騎士たちとわたしをお近づきにさせ給え。

ジャングルの獅子たち、その牙は槍にして、インドの剣。

馬たちは、わたしが彼らを戦場の炎のなかに放り込むのを見ている。

戦場の埃がわたしの証人、戦いこそが筆と帳面。

教友たち——アッラーが彼らを嘉し給わんことを——の孫たちを卑怯者と呼ぶことは彼らを侮辱することであり、二聖モスクの地を離れることを拒否して、彼らと対立することはおまえが罹っている狂気と精神的不安定を示している。しかし、その適切な治療法はイスラームの若者たちの手にかかっている。ちょうど、詩人が次のように詠ったように。

わたしは、落胆させたことのない騎士たちのためにみずからとその富をよるこんで犠牲にする。

騎士たちはけっして死に倦んだり、怖気づくことはない。たとえ戦の車が回りはじめようと。

戦の灼熱のなかで、彼らは、その「狂える」勇気で敵の狂気をもものともせぬ。

われらの土地でおまえが武器をもっているならば、おまえを恐怖させることは合法的かつ道徳的に求められる義務である。これはすべての人類や被造物に知られた合法的な権利なのだ。われらの関係はちょうど、ある人の家に入って、そのものに殺された蛇のようなものだ。卑怯なのは、自分の土地のなかを武器をもったままおまえたちを自由に歩かせ、おまえに平和と安全を提供するほうである。

これらの若者はおまえの兵隊たちとは違う。おまえの問題は、いかにしておまえの兵隊たちを納得して戦わせるかだろう。だが、われわれの問題は、戦いや作戦でいかにわれわれの若者たちを抑えて、待機させるかなのだ。これらの若者こそ賞讃に値する。

政府が著名な学者たちを誤導し、彼らを欺いて、二聖モスクの地をキリスト教徒の軍隊に開き、アクサー・モスクをシオニストに引き渡すという（アッラーの書にも預言者——神が祝福と祈りを与えんことを——のスンナにも根拠のない）ファトワーを出させたとき、彼らは宗教を守るためにすくくと立ち上がった。

聖なる書の意味を曲解してもこの事実を変えることはいっさいできない。彼らは次のような詩人の賞讃の言葉に値する。

わたしは、間違っただ道を選んだすべての批判者を拒否した。

わたしは、クラブの暖炉のまえでいつまでたっても議論しつづける連中を拒否した。

わたしは、道を見失っているのに目標にいと考えるものたちを拒否した。

わたしは、困難についてずっと尋ねたり、悩んだりせずにいるものを拒否した。

行く手にいかなる苦難があろうと、その目的を放棄することはない、

その血が、混乱の闇を導く炎を燃やす油であるものは。

わたしははまだ、体内でクドス（を失っ

た）痛みを感じる。

その喪失はまるで腸のなかが燃えるよう。

たとえ、国家が神との盟約を裏切ろうとも、わたしは裏切らない。

彼らの父祖たるアーシム・ブン・サービトは異教徒からの降伏の申し出を拒否して次のように述べている。

弓と矢と、頑丈な弦をもってはまだ健在だというのに、何ゆえ降伏せねばならぬのか。

死は真理であり、究極の定め、生などいずれば尽きるもの。

もしわたしがおまえと戦わぬのなら、わが母は気が狂うに違いない。

おまえのシオニストの兄弟たちはレバノンでムスリムを殺し、追いたて、聖域を犯してきたが、若者たちはこれをすべておまえの責任だと考えている。おまえが公然と武器や金をシオニストたちに提供してきたからだ。イラクおよびその国民に対する正当化できない攻撃（国連経済制裁）による食料や医薬品の欠如のため、60万人以上のイラクの子どもたちが死んできた。イラクの子どもたちはわれわれの子どもたちである。おまえたちアメリカとサウジの現体制はこれら無辜の子どもたちの流血に責任がある。これらすべてのため、おまえがわが国とどんな条約を結ぼうと、今や全部無効である。

フダイビヤの盟約は、預言者——神の祝福と祈りがあらんことを——と同盟関係にあるフザーア族と敵対していたバクル族をクライシュ族が支援していたことで、アッラーの使徒——神の祝福と祈りがあらんことを——により破棄された^(註51)。預言者——神の祝福と祈りがあらんことを——はクライシュ族と戦い、マッカを征服した。彼——神の祝福と祈

りがあらんことを——は、カイヌカーア族との盟約について、彼らユダヤ教徒が市場において公衆の面前で1人のムスリム女性を傷つけたため、無効であると思なした^(注52)。たった1人の女性で、こうである。おまえが原因をつくった数万のムスリムの殺害や聖域の占領はいうにおよばない。今や明らかであろう、アメリカ人兵士（ムスリムの土地を占領する敵）の血が守られねばならないなどと主張するのは、攻撃を恐れ、保身にしか関心のない現体制が強制したものを繰り返しているにすぎないのだ。アラビア半島のあらゆる部族にとって、アッラーのために戦うこと、すなわちジハードとこれら占領者から土地を浄化することは今や義務なのである。アッラーは、そこで血が（流されることを）お許しになり、彼らの富が戦利品であることをご存じだ。彼らの富は彼らを殺すものへの戦利品なのだ。至高なるものは剣の章句^(注53)で仰せになった。「だが、神聖月があけたなら、多神教徒は見つけ次第、殺してしまうがよい。ひっ捉え、追い込み、いたるところに伏兵を置いて待伏せよ。」（コーラン9:5）^(注54) われらの若者たちは、聖域を占領された結果、ムスリムが受けた屈辱が爆発とジハード以外では取り除くことができないことを知った。詩人はいう。

抑圧と屈辱の壁は銃弾の雨以外では倒されぬ。

自由人は異教徒や罪びとの支配には服さぬ。

墮落や汚名は流血なしに額より除去されぬ。

わたしは、アフガニスタンやボスニア・ヘルツェゴビナでみずからの財産や筆や舌、さらには自分自身を使って戦ったイスラーム世界の若者たちに、戦いがまだ終わっていないことを想起させる。部族同盟の戦い^(注55)の

のちのジブリール（天使ガブリエル）とアッラーの使徒——神の祝福と祈りがあらんことを——のあいだの話を思い起こせ。アッラーの使徒——神の祝福と祈りがあらんことを——がマディーナに戻って、剣を置こうとした、そのとき、ジブリール——神の祝福と祈りがあらんことを——が降りてきていわく、「おまえは剣を置いたのか。アッラーにかけて、天使たちはまだ彼らの武器を落としておらぬぞ。教友たちとともにクライザ族に進軍せよ。わたしはひと足先に彼らの心に恐怖心を投げかけ、彼らの砦を震わしてこよう」と。ジブリールは天使たち——神の祝福と祈りが彼らすべてのうえにあらんことを——と進みゆき、そのあとにアッラーの預言者——神の祝福と祈りがあらんことを——がムハージルーン（移住者）やアンサール（支援者）とともに進んでいった。（ブハーリーによって述べられる）^(注56)。

これらの若者は、もしあるものが殺されるべきでないなら、[別の] 1人が死ぬことになるを知っている。もっとも名誉ある死とはアッラーの道に殺されること。彼らは、リヤードでアメリカ人を爆破した4人の英雄たちの殉教^(注57)後、さらに決意を強くしている。これらの若者たちはウンマの頭を高くかかげ、リヤードでの作戦によりアメリカ人を辱しめた。彼らは、3000人のムスリムが数十万のローマ軍と対峙したムウタの戦いでの第二の指揮官、ジャアファルの詩を覚えている^(注58)。

楽園とその近きこと、いともよきかな。

冷えた飲み物でよきかな。

しかし、ローマ人どもには（地獄の）罰がお約束。彼らと出会えば、戦うのみ。

ジャアファルが殉教したあと、ムウタの戦いにおける第3の指揮官となったアブドゥッラー・ブン・ラワーハ^(注59)は、若干躊躇し

て、次のような詩を残した。

わが魂よ、おまえは殺されなくとも、い
ずれは死ぬ。

これはおまえのまへの死のたまり。

おまえはみずから望んできたもの（殉教）
に近づいている。おまえは、おまえ自身を
正しく導いた2人の前任指揮官の例に従う。

われわれの娘や妻や姉妹たちは、預言者—
—神の祝福と祈りがあらんことを—の敬虔
なる女性の教友たち—神が彼女たちを嘉し
給わんことを—から範をとるべきである。
彼女たちは、アッラーの宗教の優越性のため
に示された女性の教友たちの勇気と犠牲精神
と寛大さのある生きざまを模範にしなければ
ならない。彼女たちは、ハッターブの娘、フ
ァーティマの勇気と人格を記憶せねばなら
ない。彼女は、イスラームを受け入れ、彼女
の兄弟、ウマル・ブン・ハッターブのまえに立
ち、（彼がムスリムになるま前に）彼に挑んで
「ウマルよ、もし真理があなたの宗教になか
ったら、どうするのか」といった。また、ア
ブーバクルの娘、アスマーアの、聖遷（ヒジ
ュラ）の日の立場を忘れてならぬ。彼女は使
徒やその教友たちとともにあり、[マッカ郊
外の] 洞窟にいたときのこと、彼らのために
腰紐を二つに引き裂いたのだ^(註60)。さらにウ
フドの戦い^(註61)の日、アッラーの使徒—
—神の祝福と祈りがあらんことを—を守るた
め戦ったナシーバ・ビント・カアブのことも
記憶にとどめるべきである。そのとき、彼女
は12もの傷を受け、そのうちのひとつは生涯、
消えずに残ったという。ムスリム軍のために
宝石を売って資金を集めた初期イスラームの
女性の寛大さも忘れてならない。われらの女
性たちはアッラーのための寛大さの計り知れ
ない実例となってきた。彼女たちは、アフガ
ニスタン、ボスニア・ヘルツェゴビナ、チェ
チェンなどで戦うよう、息子たちや兄弟たち、

夫たちをやる気にさせ、勇気づけてきた。わ
れら、アッラーに彼女たちの行動を受け入れ、
その父、兄弟、夫、息子たちを支援するよう
お願いする。アッラーのみ言葉を高めんがた
めの寛大さ、犠牲的精神により、アッラーが、
われらの女性たちの信仰（イーマーン）を強
められんことを。われらの女性たちは、アッ
ラーの道のために戦う男たちのため以外、涙
を流すことはない。われらの女性たちはアッ
ラーの道のために戦うよう兄弟たちをけしか
ける。われらの女性たちはアッラーの道の戦
士たちのみを嘆き悲しむが、これについては
次のようにいわれている。

嘆くのはただ森のなかの獅子、燃え盛る
戦の勇者のみ。

望みは戦での誇り高き死のみ、名誉ある
死の、わが現世よりもよきかな。

われらが女性たちはジハードを勧めていう。

闘士のごとく準備せよ、そは言葉よりも
大なり。

われらの翼を喰らう不信の狼のもとに向
け立ち去るか。

不信の狼はあらゆる地よりすべての邪な
ものどもを集めたり。

武器もて自由な女たちを守る自由人はど
こか。

屈辱の生よりは死のほうがまし。醜聞も
羞恥も絶えることなし。

世界のわがムスリムの兄弟たちよ、

パレスチナや二聖モスクの地のあなたがた
の兄弟たちはあなたがたの助けを求め、あな
たがたの敵であり、彼らの敵でもあるアメリ
カ人、イスラエル人との戦いに加わることを
願っている。彼らは、イスラームの聖域から
敵が屈辱にまみれ、敗れ去って追われるよう、

あなたがたに、自分自身の方法と能力で、できるかぎりのことをするよう求めている。アッラー——いと高くあれ——は聖なる書のなかで仰せになられた。「先方が汝らに、宗教上のことで助けを求めて来たならば、やはり助けてやる義務はある。」(コーラン8:72)

アッラーの馬たち(兵士たち)よ、進むがよい。今や苦しい難儀のとき。知るがよい、イスラームの聖域を解放するため、あなたがたが集い、力を合わせる事が、「アッラーのほかに神はいない」のみ旗のもとウンマの言葉を統一する正しき道。

われわれは、この場からアッラーを畏れかしこみながら手を挙げて、この問題のすべての面で神のお導きをいただけるようアッラーにお頼み申す。

われらが主よ、われら、誠実なる学者たち、イスラームのウラマーたち、ウンマの敬虔なる若者たちの獄からの釈放を確保できるようお願い申す。アッラーよ、彼らを強め、その家族を助け給え。

われらが主よ、十字架の民が彼らの馬(兵士)とともにやってきて、二聖モスクの地を占領しております。シオニストのユダヤ人がアクサー・モスク、アッラーの使徒——神の祝福と祈りがあらんことを——の昇天の道程を好き勝手に弄んでおります。われらが主よ、彼らの集会を蹴散らし、彼らを分断し、彼らの足もとで大地を揺らし、われらをして彼らを支配せしめ給え。われらが主よ、われら、彼らの行為からあなたのもとに避難し、あなたをわれらと彼らのあいだの盾といたします。

われらが主よ、彼らの暗黒の日をわれらにお示してください。

われらが主よ、われらのため、かれらにあなたのお力の脅威をお示してください。

われらが主よ、啓典を下し給うたおかた、雲を支配されるおかた。あなたは部族同盟(アフザーブ)を打ち負かし、彼らに対しわれ

らを勝利させ給うた。

われらが主よ、われらをお助けできる唯一のおかた、われらを支える唯一のおかた。あなたのお力でわれらは進み、あなたのお力でわれらは戦う。あなただけにすがり申す。あなたはわれらの根拠。

われらが主よ、これらの若者たちは、あなたの宗教を勝利させ、あなたの旗を高くかかげるため、ここに集まりました。われらが主よ、彼らを助け、彼らの心を強め給え。

われらが主よ、イスラームの若者たちを堅固にさせ給え、彼らに忍耐を下し給え、彼らの銃弾を導き給え。

われらが主よ、ムスリムたちを団結させ、彼らの心のなかに愛を与え給え。

われらが主よ、われらに忍耐を与え給え、われらの歩みを強め給え、不信仰者に対し、われらを助け給え。

われらが主よ、あなたがかつてわれら以前のものたちに負わせたように、われらに重荷を負わせぬようお頼み申す。われらが主よ、われらに、抱えきれぬものを課されぬようお願い申す。われらに保護を与え給え、われらに慈悲を垂れ給え。あなたはわれらが後援者、不信仰者どもに対しわれらを助け給え。

われらが主よ、このウンマを導き、正しい状況にさせ給え。(それによって)あなたに服従する人びとは敬われ、従わぬ人びとは辱められましょう。それによって善行が命じられ、悪行が禁じられましょう。

われらが主よ、あなたの僕にして使徒であるムハンマドおよびその家族、子孫たち、教友たちに祝福と祈りを与え給え。

わたしの最後の頼みはただひとつ、すべての賞讃がアッラーのためにあらんことを。

ウサーマ・ブン・ムハンマド・ブン・ラーディン

1417年ラビーアッサーニー 9日

(西暦1996年8月23日)

アフガニスタン、ホラーサーン地方、
ヒンドークシュ山脈にて

資料2 1998年2月23日 al-Quds al-Arabi紙に掲載された、対米ジハードを求める

オサマ・ビンラーディンのファトワー

(<http://www.shalom-israel.org/BINLADEN.htm>)

署名:オサマ・ビンラーディン

アイマン・ザワヒリ(ジハード団)

アブー・ユースフ・リファーイー・アハマド・ターハー(イスラム集団)

ミール・ハムザ(ウラマー協会、パキスタン)

ファズルール・ラフマーン(ジハード運動、バングラデシュ)

啓示を下し、雲を支配し、党派主義を打ち負かし、コーランにて「しかし、禁じられた月々が過ぎたとき、異教徒と戦い、殺せ。彼らを見つけ、彼らを捕らえ、彼らを包囲し、計略により彼らを待ち伏せするどこでも。」と言う神に讃えあれ。そして、「神以外の何者をも信仰しないことを確かなものとするために、私は剣をとった。神は、槍の影で私に生計を与え、私の命令に従わない者には、屈辱と軽蔑を与えた。」と言った預言者ムハンマドに平安あれ。アラビア半島は、神が地をならし、砂漠を創り、海で囲んで以来、十字軍のようないかなる軍隊にも襲われることはなかった。今そこには、富を食い荒らし、畑を破壊するイナゴの大群のような十字軍が広がっている。それらすべては、皿の上の食べ物を求めて争う人々のように、国々がイスラム教徒を攻撃したときから始まった。この深刻にして支援のない状況に照らしてみれば、我々やあなた方が現在の出来事について議論することは義務であり、我々は皆、どのように問題を解決するか合意すべきである。

今日、既に周知のものとなっている3つの事実について、論じる者は誰もいない。確認のために、それらをここに列記する。

その第一は、7年間にわたり、アメリカはイスラムの地で最も聖なるアラビア半島を占領し、富を略奪し、その統治者達に命令し、人々を辱め、周囲の人々を恐れさせ、半島における彼らの基地を隣接するイスラム教徒と戦うよう拡大させた。

もし、一部の人が公に占領の事実について論じたなら、半島のすべての人々がそれを認めるだろう。

その最も良い証明は、アメリカが半島を空軍の中間着陸地として用い、イラクの人々を攻撃し

つづけていることである。たとえ、半島の統治者達すべてがその領土が利用されることに反対していても、彼らは無力である。第二には、十字軍とシオニストの同盟によるイラクの荒廃や100万人を超える大量の殺害などのあらゆることにかかわらず、アメリカ人は残虐な戦争や分裂と荒廃のあとに課された長期にわたる封鎖では満足せず、恐ろしい虐殺を繰り返そうとしている。

それゆえ、今、彼らは残った人々を全滅させ、周辺のイスラム教徒を辱めようとしている。

第三に、もし、これらの戦争の背後にあるアメリカ人の目的が宗教的なものと経済的なものであるならば、その目的は取るに足らないユダヤ教徒の国のために奉仕し、エルサレムの占領やそこでのイスラム教徒の殺害から、注意をそらせるということでもある。

このことの最も良い証明は、地域大国であるイラクを破壊することへの彼らの熱心さであり、イラク、サウジアラビア、エジプト、スーダンといった地域のすべての国々を実体のない小国に分裂させるための努力であり、そしてそれら諸国の不和や弱さを通して、イスラエルの存続と野蛮な十字軍による半島の占領を保証することである。

アメリカ人が関与するこれらすべての犯罪や罪は、明らかな神と預言者とイスラム教徒への宣戦布告である。そして、ウラマーは敵がイスラムの国々を破壊した場合、ジハードは個人的義務であると、イスラムの歴史を通じて一致して合意している。これは、イマームBin Qadamahの著作Al-Mughniやイマームal-Kisa'iの著作Al-Bada', al-Qurtubiの解釈、the shaykh of al-Islamの著作などに表れている。そこでは、次のように書かれている。「軍事的戦闘の場合、神聖さと宗教を守ることがその目的とされ、それは合意された義務である。信仰を除いて、宗教や生活を攻撃する敵を撃退すること以上に神聖なものはない。」

以上をもとに、そして神の命令への従順において、

我々はすべてのイスラム教徒に以下のファトワーを発する。

アメリカ人とその同盟者——市民でも、兵士でも——を殺害することは、それが可能であるあらゆる国において、すべてのイスラム教徒の個人的義務であり、その目的はエルサレムの阿克サー・モスクやメッカの聖モスクをアメリカ人の手から解放し、その軍隊を打ち負かし、いかなるイスラム教徒も脅すことができないようにさせ、イスラムのすべての地から追放することにある。これは、全能なる神の言葉と一致する。「異教徒が汝らすべてと戦うように、異教徒すべてと戦え。」、「争乱や圧制がなくなり、正義と神への信仰が勝つまで、彼らと戦え。」

また、次のような言葉もある。「なぜ、神のために、そして弱く虐げられ圧制を受けている人々のための戦わないのか。女性や子供は、『神よ、この圧制者の町から救いたまえ、我々を

救う者を立ち上がらせたまえ』と叫んでいる。」

神のご加護とともに、我々は神を信じ神の命令に従って報われることを望むすべてのイスラム教徒に、アメリカ人とどこでもいつでも見つけ次第、財貨を略奪する者を殺害することを求める。我々はまた、イスラム教徒のウラマーや指導者、若者、兵士達に、悪魔の米軍とその悪魔と同盟する支援者達に対する攻撃を始め、彼らの背後にいる者達を取り除くことを求める。それは、彼らの教訓となるであろう。

全能の神は言う。「信ずる者よ、神が与えた命を神が求めるとき、神とその使途に応えよ。そして、神が人間とその心の間に来たり、汝と一体となることを知れ。」

全能の神は言う。「信ずる者よ、汝が抱える問題、汝が神のために進めと求められる時、汝は大地にひれ伏す。汝は、来世よりも現世の命を選ぶのか。来世に比せば、現世での慰めなど、ごくわずかであるのに。汝が進まなければ、神は苦痛の罰によって汝を消滅させ、他の者を汝の処に置く。しかし、汝は神を害することなど、まったくできない。神は、すべてのことに力をお持ちであるから。」

全能の神は言う。「それゆえ、心を失うことも、絶望に陥ることもない。汝が真の信仰を持つならば、汝が勝利を得るに違いないのだから。」

以上

**資料3 1998年12月にアフガニスタンで行なわれたオサマ・ビンラーディンとの
インタビューのうち、大量破壊兵器に関わる部分**

“Wrath of God; Interview, Osama bin Laden lashes out against the West”, Time, January 11, 1999, p.14. (米ABCテレビが1998年12月24日に放映した、Rahimullah Yusufzaiによるオサマ・ビンラーディンへのインタビューと同じもの)

問い:アメリカは、あなたが化学兵器や核兵器を入手しようとしていると言っている。あなたは、それらの兵器をどのように使うのか?

オサマ:イスラム教徒を守るための武器の入手は、宗教的な義務である。もし、私がこれらの兵器を本当に入手していたら、私は入手できるようにしてくれたことについて神に感謝する。もし、私がこれらの兵器を入手しようと努めているならば、私は義務を果たしていることになる。異教徒がイスラム教徒に危害を加えるのを阻止するであろう兵器を取得しようと努力しないことは、イスラム教徒にとり罪である。

以上